

## 渡航記1日目（2018年3月7日）

中国渡航前に富山国際空港にて金沢大学、富山大学、富山県立大学、北陸先端科学技術大学院大学合同の結団式が行われた。初めて出会った仲間とともに過ごす研修への期待が膨らんだ。同時にたくさんの方々の支援によって研修に参加できることを改めて感じ、この機会を最大限に利用してより多くのことを吸収しようと、気が引き締まる思いだった。

飛行機に乗り、約三時間程度で私たちは大連に到着した。空港からホテルへの大連市内のバス移動中、まず目に飛び込んだのは林立する高層ビル群と巨大な広告看板であった。町の随所には歴史ある建物も見られ、日本統治時代の面影も感じられた。交通量は非常に多く、ほとんどの道が三車線から四車線程度で、路線バスや路面電車も見られた。

ホテルに着くとすぐに付近の森ビルに移動し、北陸銀行大連事務所の清水賢一所長のお話を伺った。印象的だったのは次世代高速通信、G5についてのお話だ。中国では通信環境が整備され、スマホを中心に家電をつなぐサービスが展開されるようになるということだった。電子決済や配車サービスのみでなく家電にまでIT化が進み、より速く、より便利にという時代の波が中国という巨大な市場を席卷しつつあるという事実に衝撃を受けた。その他にも内陸部開発の一路一帯や北京の新副都心を作ろうとする雄安新区など政府主導で大規模な開発が計画され実現に向かっているということだった。日本出国前には折しも国家主席の任期撤廃の法改正についてのニュースが報道され、習近平氏の独裁色の強まりに良い印象を持っていなかった。しかし、清水所長のお話を伺い、政策を効果的な時期に実行に移しやすいという一党独裁体制の強みを具体的な数字とともに知ることができた。

夕食は市内のレストランで東北料理をいただいた。回転式の丸テーブルを同行した学生、北陸銀行の方とともに囲み、様々な話をして刺激を受けた。初めて目にした料理もたくさんあって非常に楽しい食事となった。食後は星海広場に行った。春節直後ということもあり、広場や道路は電飾で彩られ、近代的な高層ビル群の夜景は圧巻だった。見渡す限り煌びやかな光の世界はこの街の発展を物語っていた。



文：人間社会学域国際学類一年 市川森太郎

渡航記1日目（2018年3月7日）

トレーニー研修は富山空港での結団式から始まった。結団式には一緒に本研修に参加する富山大学、富山県立大学、北陸先端科学技術大学院大学の学生の方、また北陸銀行様の皆様が出席され、各大学の代表者がこの研修での目標を発表した。他の人の研修に対する目標や北陸銀行の方からの熱いメッセージを聞き改めて実りある研修にしようと考え、さらにご支援いただいている北陸銀行様に感謝したいと感じた。



富山から2時間ほどのフライトで大連に到着した。入国手続き後、現地添乗員の方、北陸銀行大連事務所の方の案内で大連市内へとバスで移動した。心配していた大気状態だが日本と変わらないように感じた。また空港から市内まで途切れることなく建物が並び、郊外も発展している様子が印象的だった。

市内到着後、今回滞在するホテルのすぐ隣にあり、多くの日系企業が入居している森ビルの北陸銀行大連事務所を訪問した。こちらでは大連事務所所長の清水賢一様より中国、大連の経済状況や現状について講義形式でお話を伺った。この講義を聞き最も感じたことことは、中国に関して自分がいかに無知であったかということである。テレビなどでは中国のごく一部の側面や問題についてのみ報道されている印象を受けるが、実際中国ではさまざまな面で発展が進んでいるということがわかった。特に「中国からアジアへ」という言葉が印象深かった。

ビジネスの環境が整っている中国から成長著しいアジア地域へビジネス展開を行うメリットがあるということをおっしゃっておられた。

その後場所を移し夕食に東北料理をいただいた。円卓での食事であったため他大学の参加者、また引率の先生方、行員の方と交流を深めることができた。普段お会いすることがない方々とざっくばらんにお話しすることができ、また初日の顔合わせという意味でも良い機会になった。

文：人間社会学域国際学類一年 砂子阪将大

渡航記 2 日目（2018 年 3 月 8 日）

トレーニー派遣二日目の朝は氷点下の冷え込みとなり、日中もほとんど気温が上がらず寒さの厳しい一日となった。

午前中は YKK 株式会社（大連吉田拉鍵有限公司）を訪問した。この会社の特徴はかなり早い時期から海外進出を始めていたということであり、1959 年にニュージーランドへ進出、その後欧米各国やアジア、中南米など世界各地に進出した。中国国内には現在 13 社 74 の拠点を設けているというお話を伺い、その規模の大きさに驚いた。また顧客としてバーバリーやシャネル、ナイキといった世界的一流ブランドも名を連ねており、品質の高さが世界中からの支持を集めているということが分かる。海外展開の基本方針として、現地の経済発展に寄与すること、「土地っ子になれ」＝徹底した現地化、相互間の関係は対等、責任は平等といったことを挙げておられた。工場見学の際には、“little parts, big difference”、“小拉鍵, 大学问”といった言葉が目にとまった。ファスナーはかなり小さいが、ファスナーが機能しないと製品そのものが使えなくなってしまうため、小さなファスナーに対してこだわりをもっているという意味が込められているのだと伺い、大変印象に残った。



YKK 株式会社にて

午後はコマツ NTC 株式会社（億達日平机床有限公司）を訪問した。この会社は中国の地元企業と合弁で設立され、現在は日本人が 6 人、現地の方が 550 人働いておられると伺った。中国の企業向けの製品を多く製造しているということが特徴であり、優秀な開発計画能力やアフターサービスシステムなどを強みにしているそうだ。基本方針として安全を第一に挙げており、実際に工場内を見学させていただいた際、事故防止のための張り紙があらゆる場所に貼られていたこと、注意事項などが大変細かく示されていたこと、また安全訓練のための専用の部屋があったことなどから、どれだけ徹底した安全対策がなされているかを実感した。

夕食は市内のレストラン「大青花」にて、大変美味しい餃子料理をいただいた。ここは市内でも有名な餃子料理店であり、4大学の学生や北陸銀行の方々と親睦を深めながら、焼き餃子や蒸し餃子、その他様々な料理を楽しんだ。その後中山広場へ夜景を見に行った。中山広場は円形の広場で、帝政ロシアが統治する時代に建設されたため建築物がロシア風であるということが特徴的である。夜はさらに冷え込んだが、その寒さを忘れるくらい美しい景色であった。



中山広場

文：人間社会学域国際学類二年 越前美咲

渡航記 2 日目（2018 年 3 月 8 日）

朝から澄んだ空と気持ちの良い空気を感じながらホテルのビュッフェを頂いた。PM2.5 や大気汚染を懸念していたがそのような心配はもう不必要に思えた。

その後、ホテルから工業団地のほうへバスで向かい YKK 株式会社の視察、「大江戸」での日本食、コマツ NTC 株式会社の視察とショッピング、餃子料理を頂いた後に京劇鑑賞と盛りだくさんな一日となった。

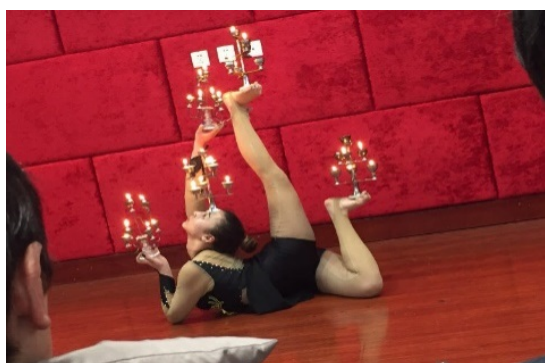
最初は YKK 株式会社に行った。日本からの海外展開企業だが、日本にとどまらず世界に大きく貢献していてユニクロやルイヴィトン等を主要顧客としたファスティング事業を中心とした会社だ。見学の前にお話を聞きいろいろと学ばせていただいた。海外展開を中国で開始した背景として今後の中国アパレル産業増加の見込みがあったからといいまだ中国が軌道に乗ってなく思っていた時から先を見据えていたことが分かった。事業員の 7 割は女性で 2 - 3 0 代が 7 割を占めるという若い力が多い会社であった。実際に工場を見学していると運搬や積み上げなどの付加価値のつかない単純作業は自動化なされており、最終検品や機械ではできない部分などは丁寧にスタッフがやっておられた。これからもドローンなどを用いることで経費削減、効率化を進めていくらしい。また地域社会への貢献、社会の幸福、利潤の追求、顧客の満足はファスナーのようにつながっていることや日本では 2000 色のファスナーの色があるが、中国ではお客様の多様なオーダーを叶えるため 4 万色の色味を作ったなどお客様への誠実なサービス精神が高いことが見て分かった。

午後から視察に行ったコマツ NTC 株式会社は 550 人の社員で自動車や機械のワーク加工設備やアフターサービスを提供している会社であった。多くの商品をアフターサービスをしていることから分かる通り環境問題にも考慮していた。またこの会社は安全に作業を行うことに大変力を入れており、工場内に各自作業場に行く前に自身の身を守る服装や作業場の正しい使い方を確認する専用の部屋があったことに感心した。そしてここでは中国人の車に対する考えなども聞いて興味深かった。

どちらの企業も日本からの海外展開企業であり、日本の会社で定められた精神を守りつつ、その場でのルールも定められていた。どちらも日本から来た社員の方が少数と現地の社員が多い中いろいろと困る点はないのかと聞いたら、生活において困ることは全然なく、言語においても始めはできなかったができるようになり、ご飯を一緒に食べたり腹を割って話したりしていく中できちんとコミュニケーションが図れたとっておられた。私たち見学者から見ても社員同士の和気あいあいとした雰囲気を感じられた。中国というと先入観で雑な製品を作っているのではとも片隅で思っていたがそれも払拭されたほど丁寧であって自分の浅はかな考えに恥ずかしく思い、現場を自分の目で見るとの大切さを実感した。

昼はから揚げやさしみといった日本食を日本らしい掘りごたつと畳で頂き、夜は水餃子や焼き餃子をはじめとするおいしい中華料理をターンテーブルで頂いた。他大学の学生や先生方、北陸銀行関係者様と勉強のことや仕事のことなどたくさんお話をさせていただいて有意義な時間になった。

夜には京劇を見に行き、楽器を用いたものや体を張った圧巻のパフォーマンスに皆で盛り上がった。



京劇



YKK 株式会社にて

文：人間社会学域国際学類一年 増本蓮

## 渡航記3日目（2018年3月9日）前半

研修最終日の今日は今までのスーツでの活動とは違い私服での活動となった。午前中は大連理工大学の学生と交流し、午後は旅順の観光、懇親会という日程であった。大連理工大学の学生との交流は今回の研修で楽しみにしていた活動の1つであった。早速大学につくと、大きな毛沢東の像が出迎えた。最近ではかなり減ってきているらしいが、中国の有名な大学には毛沢東の像が建っているところが多いという。

交流会が始まる前に、大連理工大学の方からの挨拶と大学の紹介ビデオが流された。大連理工大学の学生の方の挨拶はとても流暢な日本語であり、最初とても驚いた。そして紹介ビデオでは大連理工大学の中国での活躍や輩出した著名人が紹介され、大連理工大学がどのような大学か理解することができた。

交流会は、1グループにつき日本人学生3人、中国人学生3人の計6人で進められた。最初は互いに少し緊張気味であったが、自己紹介を終える頃にはみな楽しそうに交流していた。中には日本から持ってきたお菓子を中国人学生に渡したり、中国人学生から中国のお菓子をもらって食べながら交流をするグループもありとてもいい雰囲気であって交流会が進んでいった。交流会が終わると、大連理工大学の食堂で昼食をとった。食堂は大学に5つあり、その中でも小さい食堂であると言われたが、日本人の私たちからすると小さいとは思えなかった。食堂は中華料理のバイキングのような形だった。先ほどの交流会のグループメンバーで昼食をとり、どのグループも様々な話をしながら楽しそうに食事をした。そして最後に大連理工大学のキャンパス見学をした。中国の大学生はみな大学の寮に入るが、寮と大学の距離はとても近い。大学の近くには日本でいうデパートのようなお店があるため生活には困らないという。

大連理工大学の学生と交流して、彼らの勉強に対する姿勢は驚くものであった。高校までは



夜10時まで学校に残って勉強し、大学に入ってからかなりの時間勉強しているという。そのためか彼らの日本語はとても流暢で、全てのグループが日本語を用いて交流していた。研修に参加する前は、英語か中国語で頑張って交流しようと思っていたが、彼らの日本語の流暢さに少し甘えてしまった部分があった。また、日本に対する関心も高く、私が交流した学生からは、「東京オリンピックのマスコットキャラクターを決める際にどうして小学生が投票したの?」と聞かれ、言語だけでなく日本の社会にも関心を寄せていることに驚いた。

交流後多くの学生が連絡先を交換していた。これを機会に是非今後交流を続けていきたいと思う。

### 渡航記3日目（2018年3月9日）後半

午後には日露戦争の舞台、旅順を訪れた。今まで生きてきて、身近に戦争を感じたことはあまりなかった。映像を見たり記事を読んでも、どこか他人事のように感じていたが、旅順を訪れて強く戦争を感じ、自分の無知を恥ずかしく感じた。砲弾痕が生々しく残り、ここで一万五千人以上の方が亡くなったのだと思うと、自分の今の平和が特別なものだと感じた。また戦争に巻き込まれ亡くなった中国の方に対しても、とても申し訳ない気持ちになった。国との関係は、歴史的背景を学ばないと分からないことが多いのはもちろん、現地に行かないと感じられないものも多いのだと思った。

これから様々な国の方々と関わる身として、今後は勉強としてではなく一般教養としても歴史を学ぶべきだと強く感じた。またその際は日本の視点だけでなく、関係した国の様々な観点にも注目したい。



夜は四大学合同の懇親会があった。大連理工大学の学生さんや、各大学のOB・OGの方とも交流ができ、充実した時間となった。先輩方が世界で活躍する姿に、本当に刺激を受けた。また研修一日目から感じていた中国の勢いに対する心配が少し和らいだ。新しい機器の導入の速さや、実行力、達成力など日本とは違う勢いに圧倒されていた。これからは色々な勢いのある国と競い合っていかなければいけないと思うと、日本の現状に対する問題意識が強まっていた。しかし海外で働く日本の方のお話をきいて、中国にも日本にも良いところ、悪いところがあり、お互いをきちんと認め合って協力していくことが重要なのだと感じた。



大連を訪れてみて意外だったこと、驚いたことは多かった。情報化社会の現代でも、ネットだけでは分からない部分は多く、日本の報道だけでは分からないことだらけだった。中国と日本だけでもお互いに誤解していることは多く、きちんと理解し認め合っていくことが大切だと感じた。

今回の研修は、海外で働くということをより身近に感じ、今後のキャリアを考える良い機会となった。それぞれが持ち帰った課題を行動にして、次に繋げていきたい。